



下肢長検査法で「反応」を読み取る②

AMセミナー受講者が下肢長検査法をマスターする際、ある程度の段階があります。

最初の段階では、下肢長検査をする際の立ち位置、手の位置、手の運び方などのいわゆる「型」を修得します。「型」の修得ができた後、次は「反応」を読み取る「修得へと進みます。「型」の修得だけで下肢長を判断すると、機械的に判断する傾向があるので、検査結果は「微妙に短い」とか「微妙に揃っている」などの答え

が返ってくる傾向があります。

その一方で、熟練した「反応」を読み取ることができ、施術者では、「反応がある」か「反応がない」か、すなわち「全か無か」の検査結果が返ってくる傾向があります。「反応」を読み取ることができるようになった人と、そうでない人の違いは何かと、教える立場で長年試行錯誤した結果、技術的なことよりもその行動を生じさせる潜在的な思考、思想の影響が強いとい

うことが見えてきました。

「反応」を読み取ることに苦勞する人は、機械論的思考を強く信じている人が多い傾向があるようです。生体反応は感じなければならぬので

すが、理屈で考えるから、理屈通りの検査結果でしか得られない。例えば、「長さを計る」という機械論的な視点で診ようとする、人間の骨格は微妙にしか「ズレ」ないだろう

という思考が潜在的に働くので、下肢長検査の結果も微妙にしか変化しないということになり、その思考が、そのまま検査結果として現れます。

もしも、「反応」が示されるといふことを有機論的(生命論的)に考えると、「微妙な変化」ではなく、「明らかに変化」として示されます。

たとえば、神経学的エラーの結果、筋肉などのトーン(緊張)が変わり、足関節、膝関節、

股関節、骨盤、脊柱周辺の筋肉などの一連の連なりが有機的に変化する結果として「反応」が示されると想定することができま

す。このような有機的な仮説に基づいて検査する場合と、機械論的な仮説で検査する場合では、術者が指標とするア

ンテナが大幅に異なり、生体から読み取る情報も異なります。人間には本来高性能のセンサーが備えられています。

その高性能のセンサーを活用した下肢長検査法ができるかどうかは、施術者が信じている治療哲学や生体反応に対する捉え方にかなり影響を及ぼしているよう

です。これは、私が長年AMセミナーで指導させていただいた経験で学んだことです。とても重要なことなので、多くの治療者に学んでいただきたいと願っています。(次号に続

く)